

Title	Falernusの訳語について：ギリシア・ローマの地名表記の問題をも含めて
Sub Title	On the rendition of the Latin adjective "Falernus" : including the appellative problems of some Greek and Roman Places
Author	藤井, 昇(Fujii, Noboru)
Publisher	三田史学会
Publication year	1970
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.42, No.4 (1970. 3) ,p.113(479)- 120(486)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700300-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Falernus の訳語について

—ギリシア・ローマの

地名表記の問題をも含めて—

藤井昇

ことはきわめて単純なきっかけからはじまる。一九六九年夏に、Clerici, A. et Olivési, A.: *La République Romaine*——これはきわめて示唆に富んだ書物であって、わたしたちラテン文学の徒がともすれば見失いがちなローマの社会的背景について、たとえば「帝国」への変質過程における「騎士階級」をイギリスの「郷紳層」^{ジェントリー}に比するなど、啓発されるところが少なくない——が、邦訳「文庫クセジュ」(白水社)の一冊『ローマ共和制』として上梓されたとき、その p. 62 に、

「三四〇年には、カンパニア随一の肥沃な地域であったファレルヌムの土地が併合されたが」

Falernus の訳語について

という一句を見出し、ふと三年前に拙著『ラテン文学のすすめ』(講談社)を世に出したとき、Horatius C. II, xi の

ardentis Falerni/pocula (vv. 19-20)

の訳に苦勞したことを思いだしたのである。

これをわたしは「燃ゆるファレルヌスの酒の盃」と訳した。この Falerni 「ファレルヌスの酒の」は言うまでもなく属格形で、主格は Falernum という中性名詞である。いな、さらに正確に言うならば Falernum vinum という「形容詞+名詞」のかたちから vinum 「葡萄酒」という中性名詞が省略され、Falernum (Sc. vinum) として単独の中性名詞扱いになったものである。ラテン語ではこのような現象は珍らしくなく、ふつう名詞として意識されている amicus 「友人」も、本来「友好的な」という意味の形容詞の男性形にすぎない。だいたい名詞と形容詞を完全に区別しうる独立した二品詞として扱うことが、ギリシア・ラテン語の考えかたとして適切かどうかです。問題なのであって、Alexandria の文法家にとっては、

この両者はいずれも *ōvovα* として、区別されないのがふつどであった (Robins, R. H.: *Ancient & Mediaeval Grammatical Theory in Europe*, p. 41)。それはともかく、わたしは Falernum (Sc. vinum) を日本語として表現するにあたっては、Falernus, -a, -um (= Eng. "Falernian") という形容詞のもとになる地名を求めなくてはならなかった。そこで、Lewis & Short: *A Latin Dictionary* (Oxford) にもとづいて、*Falernus ager* の一語をもって一つの見出語として記載されている地名、すなわち英訳すれば "the Falernian territory (famed for its wine, in Campania, at the foot of Mount Massicus)" を得た。これとして *ager* 「地方」という男性名詞に、これと一致する形容詞が冠せられているにすぎないのであるが、わたしの場合は詩の訳でもあり、やむなく「ファレルヌス(地方)の酒」の意味で「ファレルヌスの酒」としたものの、なにかすっきりしない感じが残った。

* *The Oxford Classical Dictionary* の記載も同じ。

じつは、これよりさきにも似た経験があった。Vergilius の *Aeneis* の邦訳(河出書房、一九五六年)を手がけたときの *Myrmidonum Dolopumve* (II, 7) 「*Myrmidones* 人の、はたドロピア人の」がそれである。前者の主格形 *Myrmidones* (= *Myrmidōnes*) は Thessalia の *Phthia* の住民名であり、拙訳はドイツ人のことをいわずに「ジャーマンズ人」と訳すにひとしい。Achilles の塵下として有名なこの *Myrmidones* はもとも地名に由来する名ではなく、*μυρμιδῶν* 「蟻」から名付けられたという。むかし Oenone 島に住む人々が疫病で全滅したさい、Zeus がその子 Aeacus の敬虔を愛でて「蟻」を人間に変えて住民としたために、これを *Myrmidones* と呼ぶのだという。Aeacus の母は Asopos 河神の娘 Aegina で、彼女は Zeus に連れられて Oenone 島に行き、ここで Aeacus を生んだことから、島の名も Aegina となった。のちに、彼女は Thessalia に行き、この地の英雄 Actor の妻となって Menoetius (Patroclus の父) を生むが、ここで Thessalia と結びつくにせよ、そもそも

英雄 Actor の父が Myrmidones の始祖とされる Myrmidon の名をもつて呼ばれてゐて、けっきょく「蟻」うんぬんも一種の縁起ばなしにすぎない。

一方、Dolopunve 「はたドロピア人の」のほうは、主格形 Dolopes (= *Dolopes*) であつて、Aetolia 系の民とされるが、このほうは Dolopia という地名がラテン語として Livius (XXXII, xiii) にあらわれているから、Dolopes の訳は一応「ドロピア人」で落ちつくであろう。それにしても「シユルミドネス人の、はたドロピア人の」は principle において不統一な訳語であることは率直に認めなければなるまい。

いったい、Dolopes: Dolopia (of *Dolopes*: η *Doloprys*) の例が示すように、これらの地名はもともと terra, *κῆρα* にもとづく女性形と考えられ、*Doloprys* はあきらかに形容詞である。この場合には、ギリシア・ラテン語とも Dolopius, *Dolopios* という形はもたないけれども、地名語尾 *-ia* が幹尾に *-i* 音をもつ形容詞の女性形——それは必然的に第一変化の女性名詞でもありえた——という考

Falernus の訳語とつら

えかたから類推的に発生しうることは、Aetolia, Icaria, Mysia など、多くの例によって仮定しうると思われる。それはともかく、さきに地名があつて、そこからその地の住民名が派生する、という考えかたのほうは、すでに英・仏語など現代語の学習から影響された順序を追うものであり、そこには、ある民族なり部族なりが一定の土地に定住し、これを領有しているとする歴史的に誤った前提がある。とりわけ、日本という孤立した島に単一民族という意識をもつて長い間農耕生活を続けてきたわれわれが、民(部)族名↓地名、というギリシア・ラテン語本来の派生順序を逆に考え、ために訳語に苦しむのは、むしろ自然なことかもしれない。無人の土地に対しては、そこになんらかの關係——無關係という negative な關係にせよ——が、いな、關係についての自覚が、発生しないかぎり、一般に言語は名称をもたない。言語は人間の意識の反映だからである。

ところで、冒頭に挙げた『ローマ共和政』の邦訳の「ファレルヌム」(Falern-um) は地名であつて葡萄酒の名称

(四八一) 一一五

ではない。とすれば、なにゆえの中性形であろうか。この訳者である高田邦彦・石川勝二の両氏は、たとえば俗にいう「アッピア街道」についても、建設者 *Appius Claudius* に因むゆえをもって、正確に「アッピウス街道」と訳しておられる (p. 79) ので、わたしは非礼をもちえりみず、「ファレルヌム」と、もう一つ気になった訳語「サビナ」(p. 12) について、直接高田氏に手紙で質問してみた。同氏からはきわめて懇切なご返事をいただいた。内容からいって、いわゆる私信の性格が薄いので、ここに同氏のご意見を紹介させていただく。

まず、高田氏は「ラテン語の読みに関して主に *Oxford, A Latin Dictionary* に依拠」はされたが、ときに田中秀央博士の『羅和辞典』(研究社) によって記憶された読みが混入している、と前置きされた上で、

Sabina は同様「羅和辞典」によりましたが、田中先生はこの言葉をドイツの *Hermann Menge: Taschenwörterbuch der lateinischen und deutschen Sprache* から取られたようです。Oxford の辞書には載っており

ませんがドイツとフランスでは *Sabina* (*Sabini* の地方) を常用するらしく、原著も *La Sabine* を使用しております。これは *Larousse* の百科辞典にも載っております、明らかにラテン語 *Sabina* をフランス風に作り変えたものです。ちなみに訳書八四頁の終りから二行目の文章の原文を抜書きしますと、*La Sabine fut incorporée au territoire romaine, les Sabins recevant la civitas en 268.* となっており、明白に前者は *Sabina* の、後者は *Sabini* のフランス風表記であることがお分りいただけると思います。(原文は改行) *Falernum* にはぶどう酒の意味の外にその地方を指す意味もあります。Oxford には 'the name of country seat of Pompey' と記されておりますので、私もそれに従いました。

と述べておられる。しかし、わたしの質問は、むしろ独・仏の *Sabina*, *La Sabine* の起源とされている「ラテン語 *Sabina*」に焦点があった。地名 *Sabina* は、たしかに『羅和辞典』には記載があるけれども、*Schereri Lexicon*

や' Gaffiot, Quicherat のような権威あるフランスの辞典をはじめ、わたしの手もとにあるヨーロッパ諸國の Taschenwörterbuch の類には、これを載せしむなご。それび' Horatius C. III, iv, 21-22 の in arduos/tollor *Sabinos* 「われはサビーニーの丘に登る」や、散文では Nepos の Cato, ...versatus est in *Sabinis*, quod ibi heredium a patre relictum habebat. (*Cato*, 1) 「カトーはサビーニーの地に住んでいた、それはそこに父から遺された世襲地を持っていたからである」と見るごとく、

Les noms de peuples s'emploient souvent pour les noms de pays. (Noël, H.: *Cornelius Nepos*, ad loc.)

という、ラテン語の初歩的知識に属するごく普通の表現法が適用されている頻度が古典作家では100%に近い。高田氏の言われる「ラテン語 *Sabina*」は、どこに出典があるのであろうか。

* ちなみに、はるか西暦四世紀の Ausonius にあつた

Falerinus の訳語として

Sabina は人名である (*Ephigr.* LIII, LIV, LV)。その同じの MS. に残つたよめ名 (*ed. Evelyn White*) Pseudo-Sulpicia: *Queritur de statu* (Appendix Ausoniana) v. 62 によつて、地名としての *incundos Sabinos* としてあつたらしい。

こゝで、地名としての *Falerinum* であるが、高田氏の指摘の Lewis の記載が *Falerinum* (*Sc. praedium*) のそれである。引例が

...de *Falerno* Anseres depellantur. (*Phil.* XIII, v, 11) 「アンヤル一族を *Falernum* から放逐するよめ」
 Cum...*Opianicus* in *Falernum* se ad L. Quinctium contulisset (*Clu.* LXII, 175) 「ホミジュターリクスが *Falernum* の、ルーキウス・クウィーンクティウスのもとに赴いたとき」

と、いずれも *Cicero* からであるが、どちらの場合も Lewis の指摘のごとく、そこでもつた *praedium* すなわち「地所・農地」を指してあり、P. Ignacio Errandonea: *Diccionario del mundo clásico* に

“se extiende desde Saona hasta el Volturno y

^{**} el monte Callicula (en la moderna Torre di Fraccolisa)" (Falerinus ager の項)

と規定されているところの Falerinus ager 全体をどうののではない。はっきりいって Falerinus という形容詞があるのみで、地名は Falerinus ager というラテン語には存在しないと言わねばならない。訳語は「ファレルヌス (地方)」に落ちつくはかならぬのではあるからか。

* cf. Liv. VIII, xi, 13. なる Baedeker: *Italia Meridionale* の "Dans la direction du Vulture est l'ancien ager Falernus, qui produit encore de nos jours le vin généreux..." なる。

** *The Oxf. Cl. Dict.* の Mons Massicus (cf. Lewis)

*** 『羅和辞典』の異出語の Falerinus ager なる。

* 吳茂一博士は Falerinus ager に関連する le nom de peuple という、筆者は Falerii を示唆された。Falerii は Ciminus 湖の東方、Soracte 山を東南方に眺める町の名 (その Cività Castellana) であるが、語尾の -i からの判別のために Falisis-, Falerii- の対応が rho-

tacism によって説明されるものの Falsisci の民との関連をもつ部族名である。Falerii や Falisci の一だとしてゐるのが Dionys. Halic. (XIII, i, 1) であるが、彼とは同時代の Strabo の記述はさらに詳細かつ複雑で、彼は Arretium, Perusia ほか二市を挙げたもので、

τῶν δὲ ταύταις πόλιναι οὐχ αἶ, Βλήρα τε καὶ Περυσίας τε καὶ Φαλίσκων καὶ Φαλισκῶν... καὶ ἄλλαι πλείους

「これらの数多し小なる町のほかに、Blera や Ferentinum や Falerii や Faliscum や... 多くの他の町が (ある)」

と記す。Falerii, Faliscum の二市に言及しているが、そのことを Falerii を部族名として扱った——おそらく現存するただ一つの例か——下のような文章がある。

ἔνιοι δ' οὐ Τυρρηγῶνς φασὶ τοὺς Φαλεργίους, ἀλλὰ Φαλιρκούς, ἰδὸν ἔθνος· τινὲς δὲ καὶ τοὺς Φαλιρκούς τὸ λαὸν ἰδίῳ λαοσῶν· οἱ δὲ Αἰκουουμπακίτου λέγουσιν ἐπὶ τῇ Φλαμυνίῳ ὄντι κείμενον μεταστῆ Οκρικῶν καὶ Πόρμης.

(以上 V, ii, 9)

「だが、人によっては Falerii (の民) を Tyrrheni (= Tusci) ではなく、^{キトス}べつの民族として Falisci だとか、また、Falisci (の住地) = Faliscum) を固有の言語をもった町だと言うものもある。また、Via Flaminia に沿う、Orcicli とローマの間にある Aequum Faliscum を呼んで言っただともう」

これによると、一般には Falerii 族は Tusci 系だが、Falisci とひとつとみる異説もあり、一方、町としての Falerii は Faliscum とはべつで、人によっては Faliscum を Aequum Faliscum と同一視するむきもある、との解釈が成立する。Aequi はおとよへ、Osci 系の部族であるが、この Aequum Faliscum は、H. L. Jones の注釈によると、文字通りは “Level Faliscum” で、平野にあり、Faliscum のほらが古く町で、これより 3 マイル離れたところに位置するらしい。いずれにしても、このあたりは文化的に Latini と Tusci の接点である一方、Sicilia や、ついでこれを放逐したという

Falerinus の訳語について

Argos の植民者たちを通じてギリシア文化の要素をも残し、言語のみは Latini 系だったのであろう。Falerii は前四世紀には Veii の同盟都市としてローマと抗争関係にあって、これの包囲と、Falerii の教師たちの裏切りを正義をもって処理したローマの名将 Camillus の高潔な人格を中心に、Livius が記している伝説 (V, xxvii) でも有名である。

* 一九六九年五月二四日付筆者宛葉。

** Dionys. Halic. I, xxi, 1

ところで、Schereri *Lexicon* では、Falerii (*Φαλέριον*) はまた *Φαλέριον* と呼ばれ (Dionys. Halic., loc. cit.), 他方、*Φαλέριον* のラテン語形にあたる Falerinum (または Faleria) なる古都が Falerinus ager であったとしているが、わたしは浅学にしてその典拠を詳らかにしない。Falerii は Etruria の町である¹⁾、Falerinus ager の所在はこれに対して Campania なので、形容詞 Falerinus と、これに対応する部族名 Falerii とは、いかに結びつくのであるか。Livius VIII, xi にみれ

(四八五) 一一九

ば、*Falerius ager* は早くとも前三三八年以後 *Capua* からローマの支配下に移り、ローマ市民に分配されたという。*Campania* が一時 *Etrusci* 領であった名残りと思われるべきか、あるいは *Falerii* の南下があったのであろうか、古代ローマ史家のご教示を仰ぎたい。